

おはようございます。(あいさつなど)

起立して聖書箇所朗読

昔のことですが、今も忘れないできごとがあります。当時、長男は5歳くらいでした。息子を自転車のチャイルドシートに乗せて、近所の急な坂を下っていました。ジョナサンは、前の景色を見ようと右に左にと身を乗り出し、その度に自転車が左右に振れました。私はブレーキを使って、スピードを落としながら坂を下りました。それでも幼い息子は、私の運転に不安を感じたらしく、「お父さん、ちょっとスピード落としたほうがいいんじゃない？」と言いました。私はちゃんと自転車に乗れます。長年乗ってきました。けれども、5歳の息子は父親を助けてあげないといけないと思ったようです。おもしろいですね。

おもしろいことがもうひとつあります。今では27歳になった息子の運転する車にいっしょに乗ると、「ジョナサン、ちょっとスピード落としたほうがいいんじゃない？」と思うことがあります。息子はちゃんと車の運転のしかたを知っているはずなのにそう思うのです。

結局、相手を信頼するかどうかです。ジョナサンは私を信頼してくれるようになりました。心配したり不安になったりする必要がないとわかったからです。

今読んだ聖書箇所は、神を信頼することについて語ります。神を信頼するなら、心配しません。思い悩みません。先ほどの個所に、思い悩むという単語が5回登場します。25節「思い悩むな。」、27節「思い悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。」、28節「なぜ、衣服のことで思い悩むのか。」、31節「『何を食べようか』『何を飲もうか』『何を着ようか』と言って、思い悩むな。」、34節「明日のことまで思い悩むな。」

誰でも心配することがあるでしょう。一度も心配したことのない人に私は会ったことがありません。あまり心配症でない人もいれば、とても心配症の人もいます。あなたはどうでしょう。どちらのタイプになりたいですか。実は、心配から解放される方法があります。何もかもうまくいかせようと、いつも心配してなくてよいのです。実際、心配したからといって、何の役にも立ちません。この個所で言っているのはそういうことです。

この個所は、暮らしのことを心配するなどと言います。私たちに必要なものは神がご存知です。300年以上前に、聖書注釈を書いたマシュー・ヘンリーは、言いました。地上の人生が終わったときに、神が天国に連れて行ってくださると信じるなら、この世でも私たちのめんどうを見てくださると信じられないことはないはずですよ。ご飯をくださると、死後に命を与えてよみがえらせるのと、どちらが簡単だと思いますか。大きなことを神に任せて信頼するなら、小さなことも神に任せて信頼するべきです。

昔、海を渡った家族の話聞いたことがあります。これも同じようなことを言っています。一家は、船旅に出ました。裕福ではなかったのに、一生懸命お金を貯めて大型船の切符を買いました。もうお金は少ししか残っていませんでした。食べ物持参することにしました。船のレストランで高い値段を払わずにすむと思ったからです。彼らは毎日、船の客室でクラッカーやツナ缶を食べました。船旅も終わりに差し掛かったころ、最後の思い出にと、船上レストランで食事することにしました。レストランに行き、食事の値段を尋ねました。すると、なんと無料だということです。乗船券に食事代も含まれているということでした。最初からずっと高級レストランで食事をできたはずなのに、一家は客室でクラッカーや缶詰を食べていたのです。

天国に連れて行っていただけるといえるのは、大きなことです。この話の乗船券にたとえることができるでしょう。そこには、レストランでの食事が含まれていたように、日常の必要が満たされることも含まれています。だから、心配しないでください。もちろん言うのは簡単で、実際に心配するのをやめるのはなかなか難しいことです。

私もわかっているはずなのに、少し前、心配でしかたなかったことがあります。日本経済が低迷する中、私たちは大丈夫だろうか心配しました。ヨーロッパの国々の財政危機について心配しました。アメリカの諸問題についても心配しました。一旦、心配しはじめると、次から次へと心配の種が思い浮かび、きりがありません。

ふと窓に目をやると、小鳥がとまっているのが見えました。あちこちを見まわしながら、跳ねています。そして、飛んでいきました。えさをじゅうぶんに見つけられるかと心配する様子はみじんも感じられません。そのとき、この個所を思い出しました。26節はこう語ります。「空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりも価値あるものではないか。」あの鳥は心配などしません。神が鳥のめんどろを見ておられるなら、私のこともちゃんと面倒見てくださるはずで、将来がどうなるかわからなくても、神が私たちを守ってくださると確信できます。

マルティン・ルターは言いました。「将来のことはわからないが、将来をつかさどるお方を私は知っている。」神への信頼がここに現れています。ルターは自身の信仰のために裁判にかけられ、火あぶりの刑に処せられるかもしれないという状況でした。それでも、神を信頼したのです。

アメリカに、J.C.ペニーという百貨店チェーンがあります。全国の店舗数は1,000店以上にのぼります。ジェームス・キャッシュ・ペニー氏によって1900年頃に開店しました。好調なスタートを切りましたが、その後経営難に陥りました。ペニー氏は思い悩んで望みを失い、精神病院に入院するほどの状態になりました。ある日、何人かのクリスチャンが病院を訪れ、礼拝が行われました。ペニー氏は、「神があなたを大事にしてください」という賛美を聞き、そのとおりで気づきました。その後、ペニー氏はすっかり元気になり、会社を成功させ、慈善活動に多額の献金をして、95歳の長寿を全うしました。

心配するべきでない、神を信頼するべきだ、とわかっている、どうすればそうできるのでしょうか。

まず、イエスがおっしゃったように鳥のことを考えてみましょう。ただ見るだけではなく、じっくり考えてみましょう。鳥の一生を考えてみてください。鳥は木の枝から飛んで地面に落ちた実や種を取ります。これは、神の知らないところで起こっているではありません。神がその食物を備えておられるのです。神がその鳥をお造りになりました。それだけでなく、えさとなる実や種も造られました。それを毎日与えてくださいます。鳥は心配したりしません。26節にはこうありました。「空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりも価値あるものではないか。」鳥は作物を計画的に育てるのでしょうか。いいえ、神が鳥のためにえさとなるものを備えてくださいます。神が鳥のためにそれほどまでにしてくださいなら、私たちの世話もして下さらないでしょうか。

鳥には悩みがないから、誰よりも幸せな動物だと、マシュー・ヘンリーは言いました。木の枝でさえずり、せいっぱい神を賛美します。鳥のように将来に対する不安を持たずに生きられたら、私たちがいつも賛美していただけるでしょう。不安や心配が私たちから喜びを奪うのです。不安や心配が邪魔で、神を賛美できなくなるのです。神がこれまでにしてくださったことを思い出しましょう。これから何をなさるのかと案じるのはやめましょう。時が来れば、神はちゃんと必要を備えてくださいます。

次に、気苦労を乗り越える上で一番大切なことは、何よりも神の御国を求めることです。生活上の不安を払拭する一番の方法は、天国について考えることです。あの世（天国）のことを考えれば考えるほど、この世での充足感を得られるようになります。天国の豪邸に永遠に住めると思えば、今どんどこに住んでいるかは大した問題ではなくなります。純金の大通りを歩く日を思えば、今アスファルトの道を走らせる車がポンコツでもさほど気になりません。天国での喜びを思えば、目の前にある問題にとらわれずにいられます。

パウロは、「わたしにとって、生きることはキリストであり、死ぬことは利益なのです。」と言いました。

ヘブル12章は、私たちにもそのように生きるよう勧めます。私たちの模範であるイエスに目を向けましょう。主は十字架と死の苦しみを耐え忍ばれました。人々に笑われあざけられました。それでもあきらめることはありませんでした。ご自身の前に置かれた喜び、つまり天国のためにすべてをなさったからです。最悪の状況でも耐えられたのは、天国に対する期待と喜びを持っていたからです。ステファノはクリスチャンでした。その信仰のために、怒った群衆によって殺されましたが、そのとき天を見つめていました。御父のそばにイエスが立っておられるのが見えると、ステファノは言いました。

私たちは何よりも、神の御国と神の義を求めるべきです。日常生活では、どういうことがそれに当たるでしょう。世の中でクリスチャンとして生きる私たちにとって一番の課題は、自己認識を持つことでしょうか。私たちはつい、他の人たちとついしよだと思ってしまう。他の人たちも私たちと何ら変わりないと思います。けれども、それは真実ではありません。キリストにある者は新しい人です。古い人はもういません。霊的に死んでいましたが、今は生きています。神の子とされ、神の家族の一員として迎えられました。神と私たちを引き離すものは何もありません。

どうすればこのことを覚えていられるのでしょうか。反復によってです。私たちは忘れっぽい生き物です。いろいろな知識や教養を頭に詰め込みますが、すぐにどこかにいってしまいます。だから、反復することで、知識の補充をしなければなりません。これは、神のみことばである聖書と親しむことでできます。聖書を読み、じっくり考え、暗唱し、黙想することです。「これはどういう意味だろう」と考えたり、ゆっくり味わいながら音読したりしましょう。聖書を読んで学ぶとき、聖霊の導きがあるよう祈りましょう。そうすれば、必要なときに時宜にかなったみことばを神が思い出させてくださいます。先ほど、心配でしようがなかったときに窓の外の鳥を見て、聖書箇所を思い出したという話をしましたが、そのようにして神が助けてくださいます。

礼拝にも出席しましょう。神のみことばの解き明かしを聞きましょう。牧師は何時間も聖書を学んで準備してから、日曜の朝にメッセージをします。その準備のとき、みことばに思いを巡らします。理解できるように神の導きを祈ります。そして、皆さんにメッセージを伝えるとき、神の祝福があるように祈ります。ビリー・グラハムやトニー・カンポロといった有名な説教者のような語り口ではないかもしれませんが、神が私たちのために置いてくださった存在なのです。

神の真理を歌う賛美をささげましょう。歌の歌詞は驚くほど記憶に残るようです。私たちは歌って、神に賛美をささげます。神に向かって歌うのです。同時に、歌の歌詞が教えてくれる真理を心に蓄積していることにもなります。そしていつか、その言葉を思い出す日が来ます。だから、歌詞の内容はとても大切なのです。第一に、聖書の教えに沿った真理でなければなりません。次に、私たちの心に響くものである必要があります。

神の御国と神の義を求める上で、忘れてはならない重要なことが祈りです。祈りは神との会話です。創世記で、そよ風の吹くところに神がアダムとエバを訪ねてこられたという話を読んだことがあるでしょう。想像してみてください。神が近づいてこうおっしゃいます。「わたしはあなたのすぐそばにいる。いっしょに話そう。今何を思っているか教えてほしい。」祈りはこういうことです。神へのお願いリストを並べるだけではありません。祈りの中で、私たちは神を賛美し、感謝をささげます。思っていること、心配していることを神に伝えます。また、神を待ち望んで静まることもあります。神は私たちのたましいを静め、励ましてくださいます。朝でも昼でも夜でも、祈るのはいつでも良いことです。決まった時間に決まった方法で祈らなければ、神に喜んでいただけないなどと思わないでください。毎日、神に話しかけてください。

それから、神のみことばの真理に従って生きましょう。神に従って良い生き方をしていれば、それ自体が神への賛美となります。人が見ていなくても、神は私たちの言動をすべてご存知です。仕事を一生懸命すれば、神は喜んでくださいます。神に与えられた仕事の内容よりも、どういう態度でするかの方がより重要です。神のしもべという自覚をもって働きましょう。床掃除をするクリスチャン女性を神は喜んでくださいます。掃除しながら賛美歌を歌うからではなく、きちんと掃除をするからです。皆さんの仕事は何でしょう。教師、サラリーマン、工場労働者、マクドナルドの店員などさまざまでしょう。今働いていない人もいますでしょう。職務内容以上に大切なのは仕事に対する姿勢です。職場であろうと家庭であろうと、しっかり働きましょう。ベストを尽くしましょう。コロサイ3:23-24にはこうあります。「3:23 何をするにも、人に対してではなく、主に対してするように、心からしなさい。3:24 あなたがたは、主から報いとして、御国を相続させていただくことを知っています。あなたがたは主キリストに仕えているのです。」生活のために会社に勤めたり、商売をしていると思えても、本当は主に仕えているのです。ですから、主のためにしっかり働きましょう。飲食や衣服のこと、老後のことを心配する必要はありません。神がすべて備えてくださいます。主に忠実に仕えましょう。主の導きによって、仕事も生活環境も変化を遂げることがありますが、どこにいても主が必要を備えてくださいます。心を尽くして神の御国と神の義を求めましょう。そうすれば、すべての必要も与えられます。

最後に、実際に起こったお話を皆さんにしたいと思います。ここまで、心配する必要はない、神が皆さんの面倒を見てくださると言ってきました。これは、神がおっしゃることです。神はご自分のことばを必ず守られます。だからと言って、つらいことが何も起きないというわけではありません。苦しみをとおして大きなものを得ることもあります。ローマ8:28のみことばを思い出してください。「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。」これは、何もかもうまくいくという意味ではありません。悪いことが私たちに起こることもあります。けれども、神はそれをも益として働かせてくださるといえるのです。

今私は、「善なる麗しい神」という本を読んでいます。その中で、著者ジェームス・ブライアン・スミスは、娘マデリンについて書いています。

スミス夫妻には息子がいました。妻が二人目を妊娠し、娘が生まれる日を心待ちにしていました。8ヶ月の妊婦検診で医師からある知らせを受け、二人は動揺しました。非常にまれな染色体異常が胎児に見つかり、生後まもなく亡くなるだろうというのです。夫妻にはどうすることもできませ

ん。二人は呆然としたまま家路につきました。スミス氏は言います。「こんな知らせをどう受け止めればよいのだろう。第二子を迎える準備をしていたのに、心を切り替えて葬儀の準備などできるだろうか。」

医師の言ったことは部分的に間違っていました。生まれた子に染色体異常はありましたが、無事生まれました。非常に小さく、心臓に欠陥がありました。耳は聞こえず、消化器も働いていません。医師は、1~2年の命でしようと言いました。

夫婦揃ってお腹を繰り返し蹴られているような気持ちだった、とスミス氏はその頃を振り返ります。なぜこんなことが自分たちに起きたのかと思い悩みました。約2年後、ついに娘の小さな体は戦いに敗れました。

スミス氏がなんと言っているかお聞きください。「マデリンが亡くなって数年後のある日、私はひとりで昼間を過ごしていた。頭にはこの数年のできごとがよぎる。医師からあの知らせを聞いたときの苦悩や、病院の床で幾晩も眠れない夜を過ごしたこと。雲の垂れ込める雨の中、娘を葬ったあの日。神に向かった私の口をついて出た言葉は、『あの子は生まれなかったほうが幸せだったんじゃないでしょうか』だった。

そのとき、今まで経験したことがないほどはっきりと、神が答えてくださるのを感じた。この日、この時、静かなささやきが私の心に深くしみた。それは、幼い女の子の声だった。初めて聞く声だったが、それがマデリンの声だととっさにわかった。『パパ、そんなこと言わないで。もし私が生まれてなかったら、今ここにいないのよ。私は天国にいられて幸せだわ。ママもパパもジェーコブも、いつかはここに来て、みんなですっと一緒に暮らせるんだから。それに、今はわからないだろうけれど、私が生まれて他にもよかったことがあるの。いつかきっとわかるわ。』」

皆さん、神は皆さんを心にかけておられます。皆さんの必要も苦しみもご存知です。皆さんの面倒を見てくださいます。必要を満たして下さり、つらいときも乗り越えさせてくださいます。マデリンのお父さんのようにはっきりとした答えはないかもしれませんが、けれども、信じ続けてください。神は私たちの面倒をみてくださいます。すべてを働かせて益としてくださいます。その益が何であるか、この世で明らかにならないかもしれませんが、でも、必ず益として下さると神を信頼しましょう。思い悩む理由はありません。ただあるのは、神を信頼する理由だけです。

祈りましょう。